十一月二十日

○下ｐ１１９
ジョゼフは予定の通り、昨日の朝、シェルブールに立っていった。

夜は明け放たれていた。空気は冷たかった。庭の向こうには、田野が、まだ、朝霧の濃い帳のうちに眠っている。遠くのほうに、目に見えぬ谷間から来る機関車の音が聞こえた。あの汽車こそ、ジョゼフとあたしの運命を運んでゆくもの。

○下ｐ１２１
「ねえ、マリアンヌ、たしかなの、お腹が大きくなったのは。」
マリアンヌは、お腹を撫でた・・祖の太い指は、腹の皺の中に、さながら、厭に膨れた護謨（ごむ）のクッションの中に入るように沈んで見えなくなった。
「旦那さ！」
「そうさ、旦那さ・・驚いたことは驚いたが・・実際、旦那は可愛い人、優しい人だね。」
「ああ、大満足さ。それも、身重になっていないのが確かなら、尚さら嬉しいんだがね・・
あたしの年で・・情けな過ぎらアね！」
「どうでもいいさ・・もっと安心したいと思ったら、明日グアンさんとこに行くだけのことさ。」
「なあに、そんな心配は無いさ！旦那は奥さんの留守の時だけしかやって来ないし、あたしのところに長っ尻はしない・・それに洗い場からは小庭に抜けられるし、小庭の戸口は路地に開いてるから、一寸でも音がすれば、旦那は見付けられずに逃げられるって寸法さ・・万一、見つかったところで、どうしようもないじゃアないか。その時アその時さ。」

○下ｐ１２４
薄情な、虚栄心の強い、意気地無しを愛したという幻滅の外には何もありゃアしない。生白い病身らしい、眉字に皺のある顔の美しそうに見えるこの男を、どうしてあたしが愛したか・・この写真は気に障る・・いつも同じ傲慢な、ま

た卑屈な奴僕らしい眼つきであたしを眺めている間抜けなこの二つの瞳を、あたしの目の前には置いとけない。ああ、厭だ！厭だ！

○下ｐ１２５

あの人は、きっと、小さなカフェーにいると思う。四辺を見渡し議論し計画を立て、姿見の後ろにある帳場、色々の配罎や酒蓋の閃きのなかで、あたしの姿がどんなものか想像しているに違いない。あたしを征服したように、町を征服して行き来するジョゼフを脳裏に描くため、シュルブールの街筋や、広場、港を識りたく思う。思いはライヨンの森からシェルブールへ、クレールの死骸から小さいカフェーへ行く。ジョゼフの荒っぽい姿を、目の内に幻に見ながら、いつか眠りに落ちて行った。

○下ｐ１２７

ジョゼフはその手の触れる、一切のものに、自己の不可知性を与えるのだ。所持品全部が、みな持ち主の唇のように沈黙を守り、その眼、額のように見通すことの出来ないものばかり。

「鈍馬な奴だな、あまり物好き過ぎるぜ。さあ、もっと俺の肌着を調べナ。鞄や魂の中をデモよ・・何も解りっこありゃアしねえぜ！」

○下ｐ１２９

口入れ屋は没義非道の巣窟、といって、貧すりゃあ、桂庵の門口をくぐるのも仕方がない。

窃盗、そう。何処を向いても窃盗ばかり。そして喰われる奴はいつも素漢貧で、喰う奴は何不自由のない手合いと定っていやがる・・といって、さてどうしたもの？・・憤って見たり、反抗しても、つまりは犬のように野垂れ死にするより、まだしも喰われ放題になって生きてる方が増しだということになる・・

○下ｐ１２９

（コリゼ街の桂庵は、）　入るとすぐ狭い急な階段、靴の裏にこびりつきそうな汚い階段、手にねちゃねちゃ不潔な欄干、そしてむっとする籠った空気、下水と便所の臭気、このまるでぐちゃぐちゃした幼虫か冷たい蟇でも巣食っていそ

うなじとつく壁

○下ｐ１３０

桂庵は、ポーラ・デユランという四十恰好な女が切り廻していた。軽く波うつ黒髪を真ん中から分けて結い上げ、ぐにゃりとなった肉を、きついコルセットで締めつけていたが、老櫻の残りの香美しく、どことなく威厳を持っていた。そしてその眼！・・・ホウ！・・あの眼はご自慢であったに違いない！・・いつも、黒い薄手の琥珀織の服を着て、張り切った胸に金鎖を下げ、褐色の天鵞絨の襟飾りを頸に巻きつけ、白い手をしたそのどっしり重味のある美しさは、充分な、というより寧ろ傲慢なはどの品位を現せていた。その女は、市役所に勤めているルイという下役人と同棲していた。・・ルイさんはひどい近眼で、コセコセした挙措、いつも黙り屋の変物で、灰色の磨り切れたつんつるてんの背広を着て、ひどく野暮臭い、悲しそうな、ビクビクものの、若い癖に背の曲がっているこの男は、幸福ではないらしかったが、でも諦めきってるように見える。家に帰って来ても、手鞄を小脇に抱え、あたし達にも眼もくれないで、ただ一寸、帽子で挨拶するだけのこと、そして、足を曳き摺り気味にとんと幽霊のように廊下を滑って行ってしまう・・可哀相に、あの人つかれてるんだ！・・夜は、手紙を清書したり、帳簿をつけたり・・それから・・

○下ｐ１３１

「おや伯爵の奥様！・・ほほ、そりゃアもう沢山おりますこってございますよ！お飾りもののお小間使いでございましたら・・と申しますのは、何もしたがらない、遊ぶより能のない、正直だか身持がどうかは、一寸、保證しかねるような女でございますが、これなれば、いくらでもお望み次第なんでございますが、忠実に働いて、針仕事をいたすし、何もかも自分の仕事を心得ている女は、当今は、もう見当たらないようでございます。手前方はもとより、何処へいらっしゃいましても、まアございません。へえ。」

○下ｐ１３３

奥様は、ご結婚あそばしていらっしゃいますのね？」

「まア！・・お子さん方もいらっしゃいますのですね？」

「犬はお飼いですの？」
「お宅では、小間使いに夜更かしをおさせになりますでしょうか？」
「では、奥様は、夜分ちょいちょいお出かけ遊ばすのですね？」
「あの、お気の毒でございますが・
「お宅は、あたし、虫が好きません・・お宅のようなとこは、何処もご免蒙ります。」
「お前、身持ちはどう？・・情人（男）でも引っ張り込むかね？」
「で、奥様は？」

○下ｐ１３５
ビィクトアールさん！・・イレーヌさん！・・ジュルマサン！・・と、絶え間なく呼び込むおかみさんの声を聞くと、なんだか私窩子宿で客を待っているような気がする。

そのうち日は暮れて・・夜が・・昼間の暗さとさして変わらない夜が来る。喋り草臥れ、待ちあぐんだあたし達は、みな、黙してしまう。・・廊下には瓦斯の灯が一つとぼされる。五時になると決まってルイさんの少々背の曲がった白い影が、硝子越しに見える。身を廻しながら、ツと迅く通り過ぎてしまう。

○下ｐ１３６
私窩子宿の玉仕入の婆とか、品のいい容姿をした、どれも似たり寄ったりしている、丁寧な、尼さんめいた女衒達が、あたし達の帰りを待ちかまえていることがよくある。その女達は、四辺に気を配りながらあたし達について来て、巡査の監視の行き届かないシャンゼリゼーの茂った樹立の背後、薄暗い街に来ると、近寄って来て言葉を掛ける。
「うちにお入でなさいな！不自由な貧乏生活をしてないでサ。家じゃあ、楽しみでも、贅沢でも、お金でも・・それに気侭にやってけるよ。・・家のお客さんは、主に大使達だから、粋な方ばかりで、その年とかお金の都合で、それぞれお好みがあるっていうものサ。一番出るご注文が、小間使風の人ってえの。きちんとした黒い服で、白いエプロン、さっぱりしたリンネル帽子っていう風さね。肌着は上等なのがいいね。ああ、だけど、まア三箇月契約の證書を入れてご覧な・・そうすれば、あたしの方であんたに、恋の支度はしてあげるよ、フ

ランセー座の給仕女だって持ったことのないような、素敵なのを上げるがね・・ほんとに。」

○下ｐ１４１

「ジャンヌ！・・ジャンヌなんて女中の名じゃアないね、お嬢さんのような名じゃアないか。名は更えてもいいだろうね。」

「ブルターニュ生まれだね・・あたしは、ブルターニュの人は嫌いさ・・頑固で不潔だからね・」

「サン・ブリウ？じゃお前、ブルターニュ生まれだね・・あたしは、ブルターニュの人は嫌いさ・・頑固で不潔だからね・」

「まア！子供は無いだろうね？」

「子供なんて！・・ちょっとお前さんに訊くがね・

「育てることも出来ない癖に、子供をこしらえるなんて・・悪魔でも身体に巣食っているんだろう・・」

「《未婚女ジャンヌ・ル・コデックは、当家に十三箇月奉公し、仕事、品行、正直の点に於いて咎むべきもの無きを証明す・・》・・お決まり文句だよ。證明書なんて、何もなりゃあしない。」

「冬は仕事が少ないと思うのかね！梯子段、客間、旦那の書斎、・・寝部屋は勿論・・掃除して、火を入れるのは小間使いの役だよ・・扉の取手や家具もよく磨き込んで・・鏡もよく拭いて貰いたいね・・家ではね、小間使いが、養鶏場の仕事をやるんだよ・・」

「旦那のシャツの外は、小間使いが洗濯物をしたり火熨斗をかけたりするんだよ・・あたしの着物の他は、仕立てに出さないんだから、裁縫もするんだよ・・食事の時お給仕したり、下働きの手伝いして皿を拭いたり、床板に蠟引するのも小間使いの役目さ。それに家じゃあ何もかも鍵を掛けてあるからね・・」

「四十フラン！そんなべらぼうなお給金なんて訊いたこともない！好きなとこへ行くがいいよ！お前のような乞食女には不足しやしないから・・束にするほど転がってらアね。」

◯下ｐ１５１

この恐ろしい巴里、悪性の熱病に悩まされ押し合いへし合いしている巴里に迷い込んで来る田舎娘、これほど痛ましいものは無い。こんな娘を見るにつけ、思わず、自分の身につまされて、限りなく心を傷める。迷える者の行方は何処？・・何処から来たのやら？・・何で、生まれ故郷を離れたことか？・・いかなる癡戯、いかなる悲劇、また如何なる嵐が、この怒号する人生の海の上に、悲しむべき小舟を押しやって、難波させたのであろう？

その女は醜い女、こんな完全に、絶対醜い、人間としての失格といいたいほどの醜さに達しているのも稀。小柄で、胴長、四角張った胴体、平べったい尻、イザリと思われそうな短い脚。おでこで、雑巾で摩擦したような光の無い瞳、生まれつきぺちゃんこな、中央に切り傷のある、突端に行って急に高まった、荒い毛の生えている、黒い、丸い、深い、巨きな二つの穴の開いているゾッとするような鼻、それに加えて鼠色の鮫肌、死んだ毒蛇のような皮膚、明るみで見ると、粉がふいているよう。

◯下ｐ１５３

その態度がまたぶざま。一足歩くにも何かにぶつかる。執ろうとすればものを落とす。腕を家具に引っ懸けて上の物を一つ残らず砕いてしまう、歩けば肘で人の胸を突いたり、足を踏んだりする。すると太い呻くような声で詫びるのだが、これが死骸の臭い。たまらぬ臭い息を人の顔に吹きかける。・・控え室に入って来ると、あたし達の間には激昂した不平の呟きが湧く。それは、やがて侮辱的な罵声に変わり、遂には唸り声となってしまう。この哀れな生物は、罵声を浴びて部屋を横切って行く。そして女たちに、球のように突き飛ばされながら、部屋のどんづまりの腰掛に、短い脚で転がり込むように腰をかける。女たちは、いかにも厭といわんばかりに、顔を顰めながらハンケチを揚げて、後退りする振をする・・すると、その陰惨な女は、沈黙して呪われたように、文句を云うのでもなければ、反抗もせず、自分が侮辱されていることをさえわからないらしい風をして、あたし達とその女とを隔てる、伝染病警戒地帯とでも云うように、急に出来た空間は身を据えて壁に凭れる。

どうしても人間の声じゃアない。・・何か嗾のような、嗄れた、震えたもの・・ごぼごぼと鳴って落ちる雨水のような、何かころがるもの。

「家にいるとね、お父ツあんに打たれるし、おっ母さんにも打たれるし、妹達

にも打たれるし・・みんな、寄ってたかってあたしを打つんですもの・・それに、何もかもあたしにさせるんですもの・・」
「どうしてって・・打ちたいからでしょう。何処の家にも、打たれるものが、いつも一人いますね・・どうしてだかわからないけれど・・」
－あたしがあなただったら、故郷に帰ってしまうんだけれど
「いいえ、厭・・故郷には帰りたくありませんわ・・もし帰ろうものなら・・あれはものにもならないとか、雇い手が無いとか・・馬鹿にするに決まってるわ・・厭、どうしても厭・・国になんか帰れない・・帰るくらいなら死んだ方がいいわ・・」

◯下ｐ１５３
その態度がまたぶざま。一足歩くにも何かにぶつかる。執ろうとすればものを落とす。腕を家具に引っ懸けて上の物を一つ残らず砕いてしまう、歩けば肘で 人の胸を突いたり、足を踏んだりする。すると太い呻くような声で詫びるのだが、これが死骸の臭い。たまらぬ臭い息を人の顔に吹きかける。・・控え室に入って来ると、あたし達の間には激昂した不平の呟きが湧く。それは、やがて侮辱的な罵声に変わり、遂には唸り声となってしまう。この哀れな生物は、罵声 を浴びて部屋を横切って行く。そして女たちに、球のように突き飛ばされながら、部屋のどんづまりの腰掛に、短い脚で転がり込むように腰をかける。女たち は、いかにも厭といわんばかりに、顔を顰めながらハンケチを揚げて、後退りする振をする・・すると、その陰惨な女は、沈黙して呪われたように、文句を云 うのでもなければ、反抗もせず、自分が侮辱されていることをさえわからないらしい風をして、あたし達とその女とを隔てる、伝染病警戒地帯とでも云うように、急に出来た空間は身を据えて壁に凭れる。

◯下ｐ１６１
老婦人がルイズ・ランドンを訊問していた。卓の傍にはポーラ・デュランのおかみさんが勿体ぶって立っていた。この下卑た場所で、三人の下品な女が落ち合っている・・三人の女がそこにいて、顔を見合わしている
「おや、まア、お前さん、なんて小っぽけなんだい！・・・」
「まア、きたない人だねえ！」

「本当に、こんなに醜い人間が世の中に入るもんでしょうかね？・・」
「まア不思議だね・・お前さん、もう見好くなったようだよ・・もう、お前さんお顔に見慣れたんだね・・」
「まア！お前さん、どうしたんだね？・・どうしてそんなに臭いんだい？・・身体に腐ったとこでもあるのかね？・・厭だね？・・こんな臭い人があるのかしら・・大方、鼻か、肩に、癌でも出来てるんだろう？・・」
「それが大瑕なのでございます。それですから、いい奉公口を取り外すのでございます。」
「あきれたね！・・ほんとにさ！臭いにもほどがある・・これじゃア、家じゅう臭くなってしまう・・傍へよらないでおくれ！・・これじゃあ、前の条件じゃあ駄目・・お前さんを気の毒に思ったが、いくらあたしが同情してみたって、これじゃア仕方がないね・・とても駄目！」
「ですが、いかがなもんでござんしょう・・そこをご辛抱あそばしては・・きっと、この可哀相な娘は、一生ご恩にきることと思いますが・・」
「恩に着てもらったところで、この厭な臭が癒るわけじゃあるまいし・・精一杯出して、十フランより出せないね・・厭ならそれまでのことさ・・」
－いいえ！・・それでは困ります・・厭でございます・・
「まア、お聞きなさい・・ルイズさん・・ご奉公するんでしょう・・でなけりゃア、あたしは、もうあなたのお世話はご免です・・他の家で口をお探しなさい・・もう。」
「そうとも、十フランだって、恩の字だよ、お情けで、それだけ出すんだもの・・どうしてこれがいい口だという合点がゆかないんだね？あたしの方じゃあお前さんを連れて行ってみたところで、他の人同様、きっと後悔の種だがね・・さあ、一緒に行こうか」
　それっきり、ルイズを見ない。

◯下ｐ１７１
　「巴里から大して遠くない田舎に、大変な金持ちで、独り者の老人がいるんですよ。家政婦として、その屋敷にいって貰いたいんですがね・・」
　解き難い人生の皮肉からか・・でなくば、原因の解らない愚かな自家撞着からか、とも角、あんなに戀がれていた幸福、しかも現在自分の現前に現れた幸福を、断然、拒絶してしまった。「助平爺・・おお、厭だ！・・もう結構。男

ってものは、爺でも、若造でもみんな、あたしもううんざりよ・・」

○下ｐ１７３

ブルジョアの貪食に供せられる人肉の市場・・永久に流れ流れて行く哀れな漂流物、難破船の残骸・・この惨めなあたし達を漂わす汚辱の満潮と不幸の干潮・・ああ！

○下ｐ１７５

夕方頃、大分遅く、誰か扉を敲く。あたしは酒に酔って、半裸体のまま、寝台の上に身を転がしていた。

あたしは叫んだ。

「どなた？」

「手前です・・」

「お前さん、だれだい？」

「給仕です・・」

あたしは起き上がって、肌着から胸を出し、乱れた髪を肩に濡らしたまま、扉を開けた。

「何か用？」

給仕はニヤニヤ笑った・・この男は、幾度も階段で出会ったことのある、いつも、変な眼付であたしを見る、髪の赤い、大男。あたしは繰り返して訊いた。

「何か用？」

給仕は面食らって、まだニヤニヤしていた。そして、油で汚れた青い前垂れの端を、太い指で丸めながら、吃った。

「あの・・手前・・」

そいつ、あたしは給仕を帰した・・あたしは、今だにその名さえ知らない！

○下ｐ１８２

「もひとつ、お前さん方にいって置きたいのは、家では、子供は絶対にお断りするから・・お前さんがたに子供が出来るようなことがあったら、仕方がないが、早速出て行ってもらいます・・子供は真っ平です！泣いたり、何処でも駆けずり回ったり、何でも荒らしたり、馬を脅かしたり、伝染病を持って来たりしてね・・厭厭・・子供をここで生んじゃア困ります・・これはお前さん方に、

前以て断って置くから・・そのところをよくして・・気をつけて下さいよ・・」
　折しも、伯爵夫人の子供の一人が転んで、泣きながら、夫人の裾に絡わり（まつわり）、甘えに来た。夫人はその児を抱きあげて、優しい聲で揺すって、あやしてやり、情深く接吻してやった。機嫌のなおった子供は、ニコニコ笑いながら、他の子供のところに戻って行った。噫、喜楽とか、愛情とか、恋愛とか、母性というものは、ただ、富豪のためにのみあるのだろうか？
「貧乏人は、子供のいない方がいいからね・・」
－いかにもそうで、はい・・
　亭主の目は、石婦になるか、さもなくば、嬰児殺しの犯人になるように、自分が、今、運命づけた女の腹の辺を注視していた。

　女房は、コルセットを緩めた。久しく圧しつけられていた腹は、緩んで、膨らんで、その特徴的な丸み、母性の弱点、罪悪を示していた。
　「お前さん、どうして黙ってたのさ、・・あたしが身持ちだってことを・」
「だってお前！いつかのように追っ払われねえようにさ・・」
「でも、今日明日にはわかるこっちゃアないの！」
「お前も女なら、今夜にでもユルロー小母さんのとこに行くがいいぜ。あの人は薬草を持っているから！」
女は、涙ながらに、喘ぎながら行った。
「そんなことおいいでないよ・・後生だから・・そんなことしちゃあ大変だよ！」
「じゃあ、俺っちゃあ死ななきゃならないぜ・・畜生！」

○下ｐ１８５
「俺は、今、一人ぼっちになった。嚊もなければ餓鬼もない、何もありゃアしない！俺は、どうかして仇をとってやりたいと思った。・・そうだ、芝の上で遊んでいた三人の小倅を殺してやろうと、永い間、思った。だが、俺には、出来なかった。・・しょうがねえじゃねえか？怖いんだよ！・・卑怯なんだね・・人間て奴は、苦しいことを辛抱する勇気だけしか持ってねえんだよ。」

○下ｐ１８９
　ジョゼフの帰りが待遠しい！運命のもたらす希望と恐怖とを知る刹那を待っている！ああ、ジョゼフが、成功しようと失敗しようと、心変わりがしようと

しまいと、覚悟は、もう定っている。あたしは、もう、ここにはいたくない。・・あともう、数時間。ただ一夜だけ過ぎれば、あたしの将来は定る。

その連中は悪徳によってのみ、生きている。否、生きているような幻影を与えているに過ぎない・・いわば、木乃伊を支えている細紐のように、支えている 悪徳、それを奪ってしまえば、残るものは、もはや幻ですらなく、ただ、塵埃と灰燼（かいじん）・・死だけ

○下ｐ１９３

「お前さんの来方が遅いと、何だかあたし、気が気じゃないんだよ。遅くなっちゃア厭だよ。お母さんにそうおいいよ、家を留守にするのが続くようなら、もう何も上げませんって・・」

「どうしてこんなに綺麗なんだろう、可愛い顔、ああ、他の人にゃアやりたくないよ・・おや、どうしてあの綺麗な黄色い靴を履いて来なかったの？お前さんが、ここへ来る時には、どこからどこまで、隙の無いようにさせたいんだよ・・。ああ、お前さんの眼、・・色っぽいぱっちりした眼でさ、憎らしい人だね、この眼で他の女を見たことがあるに違い無いんだからね・・それからその口・・その口でさ！・・どんなことをしたか、わかりゃアしない！」

「冗談いっちゃ困るぜ！そんなことア、ありっこ無いよ、嘘はつかないよ・・本当にお母さんは、用達に出かけたんだよ！」

「まア！憎らしい人・・憎らしい人ね・・他の女を見ちゃあ厭だよ・・その可愛らしい顔も、口も、・・そのぱっちりした眼も、みんなあたしのものだよ、お前さん、私を可愛がってくれるねえ、ええ？」

いじらしいユージニーに姉妹のような愛を感じた。・・若者は、グザビエさんにたところがあった。・・この綺麗な二人の男の間には精神的の類似点があった。・・そして、この似通っていることがあたしに寂しい思いをさせた。限りなく悲しませた。

○下ｐ１９５

奥では、雇人たちの使い方を知らないばかりでなく、文句の出るのに、怖じ気をふるい、小言をいおうとしなかった。時としては、あまりに明白な、厄介な手抜かりがあると、漸っとの思いで、《何々をやっていないようだね》と吃る

ようにしていうのが関の山。そういう時には、横着な洒洒とした調子で、《奥様、失礼でございますが、奥様のお考え違いではございませんか・・でも、お気に召しませんようでしたら》といいかけるばかりのこと。すればそれっきり、お小言なし。こんなに押しの利かない、これほど嚙馬な主人に出会したことがない！

○下ｐ１９９

「そりゃあ、雑作ないことです・・賭博に勝つと同じことで、解っちまえば変哲もないもんです。・・まあ、こうするのですナ。・・毎朝、私は給仕を十五分ほど、駈けさせるんです。そうすると汗を出すでしょう。いったい、汗には脂を含んで居りますから、その汗を、地の緻密な絹布で額から拭きとって、それで、帽子を磨かせるんです。そして、了いに、鏝をかければいいんです。ですが、綺麗好きな丈夫な男を選ばなければなりませんね・・栗毛の髪の男がいいんですがね・・何故と申さば、黄金色（ブロンド）の髪の男は、どうかすると厭な臭いがしますからね・・とにかく、どんな汗でもかまわないというのではございませんよ・・昨年、英国の皇太子殿下に、この処方を献上して置きました・・

○下ｐ２０２

主人のボルグスハイム男爵は、エドガーが非常にご自慢で・・十万人の門番を破産させるような投資事業よりも、この方を、遥かに、自慢していた。男爵は丁度、絵画の所蔵家が《おお、うちのルーベンス》、といって喜ぶように、エドガーに対して、反り身になりながら、優越意識のある調子で、《おお、うちの調馬師！》とやる。けれど、実際、この幸福な男爵が自慢をするのも無理はない。自分の名声と尊敬が著しく増したからである・・エドガーのために、久しく憧憬れていて、接近し難かった客間にも出入りし得るようになったし、また、自分の血統に対する社交界の反感をも抑えることが出来たのだから。クラブで、《英国に勝った男爵の有名な話》が問題に上がったことがある・・英国は我が国から埃及（エジプト）を奪い去った。しかし、男爵は、英国から、エドガーを奪い取った・・そこで、英仏の均衡を復活することが出来たわけ。・・インドを征服したとて、こんなに賛美されることはよもあるまい。ところがこの讃美には、執こい嫉妬心が伴わずにはいなかった。ある者は男爵からエドガーを横

取りしてしまおうとさえした。エドガーは、まるで貴婦人ででもあるように、奸策、陰謀、媚などに囲まれたもの。新聞なぞは、崇拝と感激との余り、エドガーと男爵と、どっちが調馬師で、どっちが銀行家か差別（けじめ）がなくなってしまった。そしてこの両者を、相互の栄光に対して混同して同一の讃美を呈してしまった。

○下ｐ２０８
「貴婦人なんて、いい料理に使うソースのようなものさ・・作るとこを見ちゃアおしまいだ、・・どうかしようなんて気にはなれなくなるね・・」

奥さんは、異常な不思議な欲張りを示すことがあった。ただ、ニスーのサラダにも文句をつけたり、台所の掃除費を惜しんだり、三フランの請求書を拒んだり、辻馬車に乗る時は、いつも馭者と罵り合い、何とか難癖をつけて、賃金を値切った。

○下ｐ２１０
ウィリアムは田舎が嫌い。野原や樹の間や花の中は倦怠の種。・・自然というものも、酒場や馬券や、競馬騎手が射手こそはじめて辛抱が出来る。生粋の巴里っ子。
「花だって？花ってものはね、帽子の上についてるか、帽子屋にでもなければいいものじゃアないよ。小鳥だってそうさ、なんでえ、まるでがなり声で歌を唄っている餓鬼のように朝っぱらから煩くって、寝られやしない！ああ厭だ厭だ。田舎なんて俺は大嫌いだよ・・田舎なんて百姓ででもなけりゃア、いられやしねえや・・」

○下ｐ２１７
「わかったかい、セレスチーヌ・・俺たちは自分たちの仕えている人間よりも、強くならなけりゃア駄目だ・・出来るだけうまい汁を吸うってことよ・・利口でよく気の廻る人間に雇われてるのは、そりゃア、してやられるこったぜ・・俺は、主人の悪口を並べたり、主人達を困らせたり、嚇かしたりして暮している奉公人がある思うと、ああ、こなれていねえ畜生達じゃねえか・・中には、

主人を殺そうなんてする奴さえもあるんだが、殺して！それからどうなるんだい・・牛乳を飲ましてくれる牛や、羅紗をくれる羊を殺すかい？器用に、おとなしく、乳を搾ったり、毛を刈ったりするものさ。」

○下ｐ２２２

「貴方はあたしなんかどうだっていいのね。あたしもやっぱり馬鹿ですわ。綺麗になるように気を揉んだり、なるたけ貴方の気に入るようなものを見つけようなんて・・だのにあたしのことなんてお構いなしなんですもの・・いったいあたしは貴方のなんなの？何でもありゃアしない・・何でもないのね！ここへ入らしって・・何をご覧になるの？こんなくだらない雑誌なんか・・何を面白がるかと思えば、判じ物だなんて・・ああ！あなたがあたしにさせて下さる生活ったら、ほんとに結構なものですよ・・人を訪ねるんじゃアなし、まるで娘みたいな生活だわ・・貧乏人みたいだわ。」

「ねえ、ねえ・・頼むから・・そう怒らないでね・・そう、貧乏人のようにさ・・。」

「煩いっていうのに？かまわないで頂戴よ・・傍に寄らないで頂戴・・本当に、利己主義者だったら・・馬鹿太りめ・・あなた、あたしに何もして下されないのね・・なんて意気地なしなんだから！」

「何故、そんなこというんだい・・狂人だね、まア、そう怒るのはおよしょ・・いかにも僕が悪かった・・そのコルセットにすぐ気が附く筈だったんだ。・・この綺麗なのにさ・・どうして気がつかなかったんだろうね？全くわからない！・・こっちをご覧！笑っておくれ・・よう、実に素晴らしい・・素敵に似合ってるよ！

「まあ、お前、そりゃア無理というもんだよ・・コルセット一つで・・何も関係のないこっちゃアないか・・さあ、こっちを向いて・・笑ってご覧・・コルセットで喧嘩するなんて、馬鹿らしいじゃアないか・・」

「ああ、煩い！煩い！煩い！・・出て行って下さい」

「馬鹿！畜生！うるせいったらそっちのこったイ！いつもその手だ・・何かいったりしたりすると。まるで、犬同然に扱いやがる・・きまって、乱暴な、無作法なまねをしやがって・・こんな生活はもう真っ平だ・・裏店の嬶アみたいな仕草にも飽き飽きした・・何をいって貰いたいんだ・・コルセットだって・・

よしいってやろう・・見っともないよ。ああ、コルセットは・・何だい、白首のコルセットじゃアないか・・」

「意気地無し、よくもそんなことがいえるね？そんなこといえた義理かい？あん時はどうだったい、お前さんを泥の中から引っ張り上げた時は。見すぼらしいざまったらなかったじゃアないか・・倶楽部じゃあ札つき者になったし、借金で首が廻らなかったじゃアないか。そんな大きな顔していなかったね！名がなんだい？爵位がなんだい？結構だよ。高利貸しだって、お前さんの名や爵位をかたに鐚一文だって貸すこっちゃアない・・欲しけりゃアいつでも返すよ。ああ、それでお尻でも拭くがいいや・・貴族だ、先祖だって鼻にかけて、あたしが買ひとつで食べさせているこの人がさ！貴族なんてなんにもなりゃあしないじゃアないか・・悪いぐらいだ・・ご先祖だって、ふん、質に入れても、老いぼれた兵隊や折助面に免じて、十スーがとこ貸してくれればめっけものさね。誰が、誰が、・・貸すもんか！・・お前さんなんか、銘酒屋這いりが相当だよ、詐欺師め、淫売屋の親父！」

◯下ｐ２２７

「何でもございません・・でも、その奥様の仰ることがおかしくって・・ばかばかしくって・・・ホホホ・・・ハハハ・・・ほんとにばかげきってますわ！」

勿論その晩、あたしは、この家を去って、またもや街路をうろつく身になった。

惨めな生活！情けない職業！

◯下ｐ２２８

何が何やらわからなくなって、人殺しをもしかねまじくなる・・あの日、何故、あの女を殺さなかったろう？・・どうして、あの女の首をしめなかったろう？・・

◯下ｐ２３１

「セレスチーヌ、生きて行くには、身持ちがよくなくっちゃあいけないよ。それに俺のように臨機応変てことが肝心だということがわかってるかね・・お前は、身持ちが悪いし、臨機応変だって下手だ・・お前は、すぐ感情に走ってしまうから駄目だよ・・感情って奴は、俺たちの身分には大禁物だ・・《浮き世は

浮き世だ》ってことを覚えていなよ！」

○下ｐ２３４

行く人がみな幽霊のように思われた。遠くから、丁度、暗夜の燈台のように、また、日に映える金色の円屋根のように、輝く帽子を冠った紳士を見かけた時には、心がハッと波打った・・が、それは、ウィリアムとは、てんで違った外の人。・・錫のような色をした低い空の何処にも、一つの希望も煌めいてはいなかった。

○下ｐ２３６

もう、朝の二時・・火は消えかかっている、ランプの火も暗くなった。けれど、薪も油も持っていない。寝よう・・だが、頭の中が非常に熱いので眠れそうにもない・・自分のほうに近づいて来るものでも夢見よう。・・外は、夜が森々と静まり返っている・・骨を刺すような寒さが、まばたく星空の下で、大地を凍らしている。ジョゼフは、今頃、何処かを通っているに違いない・・虚空を通じて、ジョゼフが汽車の一室にもっともらしい容姿をして、考え込み、大きな身を凭せているのが、まざまざと見える・・あたしに対して微笑んでいる・・あたしの方に近寄って来る・・遂に、平和と自由と幸福― 幸福？― とをあたしに齎して来るんだ・・

明日は会える・・

**日付無し（八箇月間というもの、唯の一行も日記を書かなかった）**

○下ｐ２３７

海から生まれたあたしは、また、海に帰った。さほど海を恋しいとは思わなかったが、さて、帰って来てみると、やはり、嬉しい。あのオーディエルヌの寂寥（せきりょう）とした景色、あの海岸の茫漠とした陰惨な気分、激しい絶叫を響かす渚のもの凄まじさとは全く趣が異なって、このシェルブールでは、あらゆるものが悲哀を帯びてない。総てが歓喜に充ちている・・軍港町の賑やかな響き、美しい動き、軍港のごたごたした忙しなさがある。色を漁る水平の群れが、剣を鳴らして通る。長い航海と航海との間の、享楽を急ぐ水夫の群れ、絶えず移り変わる、興深き眺め・・そこにあたしは、おさな時代にはつれなく思われていたものの、なお常に心離れぬあの故郷の空の藻草とコールタールの

匂いを吸う。

○下ｐ２３９

－奥様－ 旦那様－ 早く降りて来て下さい。泥棒です泥棒。

「どうした？・・どうした？」

－ 泥棒です。泥棒です。

「泥棒？何を盗られた？」

「まア？まア！」

「何を盗られた？・・何を？」

「あたしの道具が！・・まア！・・どうしたっていうんだろう？・・あたしの道具が？・・」

「すっかり盗られた！・・すっかり！・・ルイ十六世の薬味入れまで。」

「ルイ十六世の薬味入れ！・・ルイ十六世の薬味入れ！・・ああ！泥棒め！」

○下ｐ２４０

「あたしの道具が！・・まア！・・どうしたっていうんだろう？・・あたしの道具が？・・」

「すっかり盗られた！・・すっかり！・・ルイ十六世の薬味入れまで。」

「ルイ十六世の薬味入れ！・・ルイ十六世の薬味入れ！・・ああ！泥棒め！」

○下ｐ２４１

その犯行は、もの凄い、荘重な、審判的、宗教的なあるものを持っている。それはあたしの心を震撼させたが、同時に・・なんといおうか

あたしの感じたものは、ただあたしの肉体のみに作用し、熱せしめたに過ぎない。いわば、自分の肉体を狂暴に動揺された時の、苦しいけれど、また気持ちのいい感じ、暴行される婦人の心理といったもの。これは不思議な、特別な、また勿論、恐怖すべきことではあるが－そして、こうした変な強い感覚の真因をなんと説明する術もないが、－あたしの心の裏では、総ての犯罪、就中（なかんずく）、殺人罪は、恋愛とある秘めやかな共感を持っている・・そう・・。立派な犯罪は、偉丈夫のようにあたしの心を捉える。

○下ｐ２４２
　ここに、土竜か幼虫のような生活をしている二箇の生き物がある。・・獄舎の人となっているものがいる。彼らは、この高い壁の牢獄の裏に我と我から身を閉じ籠めている。人生の快楽、家庭の微笑なぞは要なき冗物として、捨ててしまう。自己の富の言い訳となるもの、自己の人としての無能性の弁解となり得るものを、汚いものとして遠ざける彼らは、そのけちな食卓から、麺麭屑一片れさえ、貧者の上のために落とさない。枯渇した心臓はもだえるものの苦しみに、何一つ落とさない。自己の幸福さえをも節約する。彼らの財産の一部を奪い取って、空しく埋められていた財宝を大気に晒したお泥棒様こそ、世の中の平行を回復したもの・・

○下ｐ２４７
　ジョゼフが、この大層な略奪に関係しているという考えは、直ちに、頭に浮かんで、それが今では、強まったものになって来た。シェルブールへの旅行と、この巧妙な犯罪の準備との間には、たしかにある関係が結ばれていよう。
　あたしは、この予感を消そうとはしなかった。反って非常な喜びをもって、その予感を楽しんだ。
「ねえ、ジョゼフ、小クレールを森の中で殺したのはお前でしょう？・・それから、奥さんの銀器を盗ったのもお前だわね？」
　ジョゼフは、あたしをじっと見つめ、突然、返答もせずに、抱き寄せて、棒で撲るような力の籠った接吻を、あたしの襟足に与えながらいった。
「お前は俺と一緒にあの小さな珈琲店を出すんじゃアないか、・・それに俺たち二人は、同じ心をもっているんだからな・・」

○下ｐ２４８
「ねえ、ジョゼフ、小クレールを森の中で殺したのはお前でしょう？・・それから、奥さんの銀器を盗ったのもお前だわね？」

○下ｐ２４９
「怪しいのはあの小間使いきりです。あれの身元は私もよく知りません。きっと、巴里に何か悪い者でもいるのでしょうか、ふだん、よく巴里へ手紙を出し

ています。家の葡萄酒を陰で飲んだり梅干しを盗み食いしたりしているところを、幾度も見たことがあります。主人の酒を飲むような者は、何でも仕兼ねませんからね。」

「巴里の女なんか雇うものではございませんね。ほんとに怪しいところがありますよ。」

○下ｐ２５１

犯罪の告白のようにあたしに接吻したあの晩、ジョゼフの信頼が情欲と一緒にあたしに向かって来た晩以後にあっては、ジョゼフは事実を否定した。いかに罠をかけても、優しい狎れ狎れしい言葉と愛とで、鎌をかけようとしても無駄だった。あたしには、この不可解な男をどう思っていいかわからなくなった。ある時はその無実を信じた。ある時は犯人と信じた。そして、これがあたしを苦しめた。

○下ｐ２５３

「俺たちが出て行くのを、奥で泣くようでなけりゃア・・」

○下ｐ２５５

自分の気持ちが、ほんの束の間の好奇心じゃアないかしらということ。ジョゼフはあたしの肉体と一緒にあたしの魂をも捉えたけれど、それが永続きしないように思われた。あたしの方にしても、刹那の感情の迷いに陥っているような気がした。ジョゼフという男は、ただ鈍重な田舎者で、素晴らしい犯罪や暴行なんぞやることの出来ない男ではあるまいか・・自分が考えるようなジョゼフを作り上げたのは、変わった夢を追おうとする心に駆られた空想ではあるまいか、なぞと自分に訊ねる折もあった。こうしたことになった後のことが怖かった。

不可解なことだが、もう再び他人の家に奉公が出来なくなったということが、ある未練を感じさせた。　自由の身になる日を雀躍して喜ぶことと思っていた。

召使いには召使いの血が流れているもの。ブルジョワのあの贅沢な態が、俄にあたしの眼前から消えてしまったら?労働者の家のように、冷たい貧弱な九

尺一間、綺麗なものや手触りも心良い衣服や、まるで香水のお湯にでも入っているように、いい気持ちになって、手練手管で綾つる美貌の悪徳の持ち主なぞから、すっぱり無関係になって送る平凡な生活、

○下ｐ２５６

はじめて、ブリューレへついたあの雨模様の灰色の寂しい日に、あれほど侮蔑の眼であたしを見守った、むっつりだんまりの妙な男と、今日、夫婦になろうとは。

○下ｐ２５７

あたしの心配していることを訊ねても、その言葉がわからないような風をする。そして、その刹那の眼には、昔のように、薄気味悪い閃光が走る。永遠にジョゼフについては何も知り得まい。この不可解の点が、あたしをジョゼフに結びつけたのであろう。

○下ｐ２５８

彼の力で、「仏軍歓待」という看板が、昼は大きな金文字で、夜は赤々とした火の文字で町の上に輝いている。この小さなカフェーは、今やこの市の愛国者や反猶太主義者の集会所になっている。彼等は、酒間に、陸軍の下士や海軍の将校と友誼を保つために集まって来る。血塗れ騒ぎも、もう、数回あった。下士達は何でもないつまらないことに剣を抜いて、仮想の国賊を威嚇する。。ドレフユウスが仏国に上陸した晩なぞは《軍隊万歳！・・》《猶太人をやっつけろ！》といった喚きに、この小さなカフェーがひっくり返りゃあしないかと心配したくらい。既に、町に顔の売れていたジョゼフは、この晩、大成功を得た。ジョゼフは、テーブルの上に昇って、大声で怒鳴った。

「もし、国賊が有罪なれば、即刻、追放しろ、無罪ならば、即刻、銃殺しろ！」

「そうだ、そうだ、銃殺しろ！軍隊万歳！」

○下ｐ２６０、２６１

「アルザス風の髪形が似合うぜ、どうだい？アルザス風の髪に結っちゃあ・・すると会計台が素敵になるんだがなあ。」

「戦争の時にゃあ、綺麗に、着飾ったアルザスの女を見ると、誰の心も昂奮し

て愛国心が湧き上がるんだ。愛国心ほど人を酔わせるものはないからね。お前の写真を新聞に出させよう・・それからポスターにもなア。」

ジョゼフの考え込んでいる姿を見る度にあたしの心は燃えるようになる。悲劇の一場面を想像する、闇夜の逃走、掠奪、短刀のきらめき、森の灌木の上に喘いでいる人達を・・

◯下ｐ２６１

あたしにはジョゼフの心に逆らうことは出来ない。ジョゼフは悪魔のように、あたしをしっかり掴んでいる。あたしはジョゼフのものであることを、いっそ幸福に思っている。ジョゼフの命令のままに何でもしよう、何処へも行こう・・たとえ罪悪の中までも。